

女高師と皇室

—大学資料調査の成果と課題—

奥田 環・矢越 葉子

はじめに

お茶の水女子大学では、平成9(1997)年1月より、大学資料委員会のもとで学内に残る大学資料の悉皆調査を始めた。平成19年3月現在で約3200点に及ぶ資料を調査し、データベースにまとめてきた。資料の収蔵場所は、附属図書館、ジェンダー研究センター、附属校園そのほか、と多岐にわたる。それらの中には、皇室に関連するものが多数見出される。それは女高師と皇室との関係の深さを物語るものに他ならない。本稿では、大学資料調査の過程で見出された皇室関係の資料を、時代を追って提示し、それらを検討することによって、本学の歴史の一側面を振り返ることを目的とするとともに、大学資料調査の意義と今後の課題について言及したい。

なお、本学は明治8(1875)年11月、東京女子師範学校として開校し、東京師範学校女子部、高等師範学校女子部、女子高等師範学校と名称変更を経て、明治41年4月、東京女子高等師範学校となり、昭和24(1949)年5月のお茶の水女子大学の発足、昭和27年4月の東京女子高等師範学校廃止をもって、現在のお茶の水女子大学に至る。本稿では、開校から東京女子高等師範学校の時代を主に取り扱うため、校名を略称の「女高師」と一括して呼称することとする。また、本文では、旧字体を新字体にあらため、統一して使用する。

第1章 昭憲皇太后と女高師

昭憲皇太后は、明治元(1868)年12月28日に皇后として冊立された。女子教育に深い関心を抱き、多くの女子教育機関に援助をしたことは先行研究に詳しい¹。明治8年に開校した本学に対してもその生涯にわたって大きな役割を果たすこととなる。

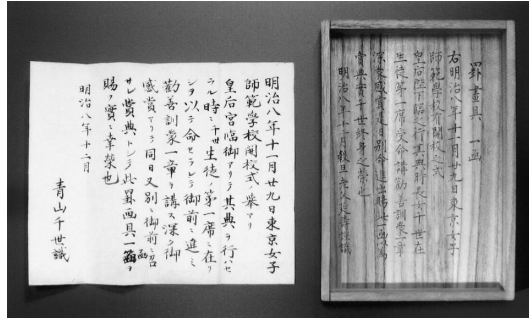
第1節 開校

明治8年、2月に御内庫金から下賜された5000円を開校資金として、女高師はお茶の水の地に開校した。皇后(昭憲皇太后)は11月29日の開校式に臨席し、この日が本学の開学記念日とされている。賜った令旨の文面からは、開校を心待ちにしていた様(「去年此校ヲ設置有ントスルヲ聞キ嘉尚ニ堪ヘス」)や今後の女子教育への貢献に期待を寄せる様(「庶幾クハ自今此校ノ旺盛ニ赴キ遂ニ女教ノ美果ヲシテ全国ニ蕃結スルヲ觀シコトヲ」)が窺われる²。

開校式に続き、生徒代表3名による講話(青山千世『勸善訓蒙』、吉川若菜『西国立志篇』、古市洛『国史要覧』)が御前において実施され、生徒3名は皇后から掛画具1組ずつを下賜された。現在、本学には

青山千世の賜った箱のみが伝わる。外箱には本品の下賜を「実千世終身之栄也」と賞賛する、旧水戸藩士である千世の父による讃が添えられ、「実ニ幸栄也」と喜ぶ千世の手になる覚書が入られている(写真1)³。

写真1 青山千世覚書および青山延寿讃



また、翌年2月15日⁴には皇后御製歌「みがかずば」が下賜された⁵。この歌にはのちに讃が付され、現在でも校歌として歌い継がれている。

第2節 行啓

皇后は開校の後も、幼稚園開園式、第一回卒業証書授与式などの行事への臨席や授業参観のためにしばしば行啓し、その回数は11回にのぼる。行啓に際しては、令旨とともに学用品などが下賜されることもあった。『六十年史』により判明する行啓や皇族の来校は表1の通りである。

表1 明治期の皇族の来校

	年月日	来校者	目的	下賜品
1	明治8年11月29日	皇后	開校式	令旨
2	明治9年9月25日	皇后	実地授業御覧	令旨、半紙十帖;生徒一同
3	明治10年11月27日	皇太后、皇后	幼稚園開園式	令旨、端物一反並酒肴:本校職員、御菓子一折;生徒及幼児
4	明治12年2月13日 ※1	皇后、有栖川宮御息所 薫子、東伏見宮御息所 頼子、北白川宮御息所 光子、華頂宮御息所 郁子	第一回卒業証書授与式	令旨
5	明治14年5月24日	皇后	御通覧(本校・附属校園)	令旨、賜物:摂理以下、半紙三十帖ずつ:本科生、半紙二十帖ずつ:予科生、半紙十帖ずつ:小学校児童、御菓子一折ずつ:幼稚園園児

6	明治19年5月18日	天皇	御通覧	勅語、酒肴料：職員一同、半紙：本校・附属小学校生徒一同、御菓子：附属幼稚園幼児一同
7	明治19年5月29日	皇太后、皇后	御覧	
8	明治25年4月25日	皇后	御覧	令旨、金円 ※2
9	明治26年11月16日	皇后	御通覧	金円 ※3
10	明治29年5月18日	皇后	御通覧	金円 ※4
11	明治35年10月28日	皇后	御通覧	金円 ※5
12	明治41年6月5日	皇后	御通覧	菓子料：職員・生徒一同、金円 ※6
13	明治41年11月29日	迪宮裕仁親王・淳宮雍仁親王	第三十四回開校記念式、如蘭会総会	
14	明治42年12月3日	光宮宣仁親王	授業御通覧（附属幼稚園、附属小学校）	
15	明治45年6月3日	皇后	御覧	御菓子：文部大臣・農商務大臣、金一封 ※7

※1 『百年史』は、『文部省第七年報』（明治12年）により3月に延引されたとする。

金円の用途は以下の通りである。

※2 本校生徒：別製土佐日記二冊ずつ、高等女学校生徒：別製土佐日記一冊ずつ、小学校児童：別製烏丸帖一冊ずつ、幼稚園幼児：昔噺絵本一折ずつ

※3 本校生徒・附属女学校生徒：女四書一部ずつ、小学校第一部・第二部児童：童子訓一部ずつ、小学校第三部児童：算盤一個ずつ、幼稚園児童：歴史恩物絵、幼稚園分室幼児：石盤・日本物産図会一個ずつ

※4 本校生徒・高等女学校生徒：特別製明倫歌集、附属小学校第一部児童：山内一豊夫人伝、附属小学校第二部・第三部児童：二宮尊徳翁伝、幼稚園児童：昔噺折本

※5 設備（本校：ピンポン、附属高等女学校：垂環梁木、附属小学校：遊動円木、附属幼稚園：軍艦「朝日」模型）

※6 職員・生徒・附属高等女学校生徒：御親筆御歌の印刷、附属小学校生徒：遊戯物、幼稚園児童：椅子・プランコ

※7 恩賜奨学資金

来校者の顔触れを見ると、開校から10年余りの間は、6のように天皇による行幸の事例や、3・7のように皇后と共に皇太后（英照皇太后）が行啓している事例、4のように皇后と共に宮家の御息所が来校する事例も見られる。しかし、明治20年代から40年代初頭にかけて、皇后単独での行啓のみが実施されるようになり、皇后の女高師への関心が維持されていることを窺わせる。なお、40年代には迪宮と淳宮（13）、光宮（14）と計3名の皇孫が来校しているが、このような皇后以外の皇族の来校は大正期以降いよいよ盛んとなっていく。

行啓の際の下賜品は、表1に明らかなように、当初は半紙や反物、菓子などであったが、皇后単独での行啓期には金円へと変化し、女高師側にその用途が委ねられるようになった。その結果、備品や教材の充実が図られ、また恩賜奨学資金が設けられるなど教育環境の整備も進められる。

明治期の行啓に関しては資料の残存状況も悪く、具体的内容については不明な部分も多い。しかし、最後の行啓となった45年6月3日の行啓（15）に際しては、「行啓記念」「明治四十五年六月三日」銘の記念スタンプが作製されている（図1）⁶。

図1 行啓記念スタンプ（明治45年6月3日）



なお、令旨のうち、9年9月25日(2)、10年11月27日(3)、12年2月13日(4)のものは、資料調査で所在が確認された⁷。

第3節 遺品の下賜

昭憲皇太后は大正3(1914)年4月11日に崩御した。遺品は、教育機関としては学習院女子部と女高師にのみ下賜された。本学への下賜は同年12月1日に実施され、校長中川謙二郎が文部省へ出向き、梨子地桐鳳凰蒔絵御料紙文匣・御硯箱を受領した⁸。本品には皇太后宮から文部省への文書(写)および文部省より女高師へ宛てた文書が付属するが、皇太后宮からの書面には「昭憲皇太后御遺物ニ付き記念ノ為メ東京女子高等師範学校へ下賜相成候事」と見える。当日の様相については『六十年史』に詳しい⁹。下賜の翌々日、一木喜徳郎文相が来校し、本下賜品および過去に下賜された親筆の和歌、抱一書三幅対¹⁰を見学する。なお、このような昭憲皇太后の遺品および下賜品を展示の中心とした明治記念室が、開校四十周年に当たる4年11月29日に開設されている¹¹。

また、附属図書館に現存する「御親筆御歌写交付簿」は3年10月付けで記載が始められており、崩御を受けて御製歌「みがかずば」の写しが作成され、関係者に配布されたことが判明する。

崩御から一周年に当たる4年4月11日には本校でも御一周年祭儀式が挙行され、また6年4月11日の第三回御式年祭当日にも式が挙行されている。明治天皇の崩御に当たっては周忌的な哀悼の儀式は実施されておらず、女高師における昭憲皇太后の存在意義を考える上でも興味深い。

第2章 大正・昭和期における皇族の来校

第1章で見たように黎明期の女高師に昭憲皇太后が果たした役割は大きく、その崩御に際しては女高師側でもその顕彰に尽力した。また、遺品の下賜に見られるように、皇室側も女高師に対しては特別な位置付けをしていたものと考えられる。大正以降もそのような関係は維持され、皇后による行啓のほか、他の皇族による来校も実施されるようになる。

第1節 来校の記録

大正から昭和にかけて、『六十年史』や『校報』、また現存資料により日付が具体的に判明する皇族の来校は表2の通りである。

表2 大正・昭和期の皇族の来校

	年月日	来校者	目的	下賜品
16	大正4年11月29日	伏見宮博恭王妃経子	開校四十年分立二十五年記念式、明治記念室新設	令旨
17	大正5年10月23日	皇后	御覧	御袴地一反：校長、御菓子三台：職員、金一封（御菓子料）※8
18	大正7年6月5日	東伏見宮妃周子	授業台覧	金一封（御菓子料）
19	大正12年12月8日	皇后	授業御巡覧	金円 ※9
20	大正13年10月27日	皇后	女子教育奨励、御覧	酒肴料：校長以下各職員、金一封（菓子料）：生徒・児童・幼児
21	大正14年6月11日	東伏見宮妃周子	授業御覧	御菓子料
22	大正14年11月29日	皇后	開校五十年記念式	令旨、金一封：学校、金円（御菓子料）：職員・生徒・児童・幼児一同、白羽二重：校長、御菓子：職員
23	昭和3年10月22日	閑院宮春仁王殿下妃直子、北白川宮美年子女王、北白川宮佐和子女王、李王殿下妃方子女王、李徳恵姫	運動会	
24	昭和4年10月18日	秩父宮妃勢津子、閑院宮妃直子	運動会	
25	昭和5年3月27日	皇后	御巡覧	令旨、御菓子：職員・生徒・児童・幼児
26	昭和7年11月29日	東伏見宮妃周子	本校開校記念式並びに附属高等女学校創立五十年祝賀式	金一封
27	昭和9年6月16日	李王妃方子女王	保育の実際につき御巡覧	
28	昭和9年10月29日	皇后	開校六十周年記念式	令旨
29	昭和10年10月18日	北白川宮妃祥子	運動会	
30	昭和11年10月21日	皇太后	台覧	金円
31	昭和14年10月9日	朝香宮鳩彦王	東京特設中等教員養成所視察	
32	昭和15年12月3日	皇后		
33	昭和16年7月10日	北白川宮妃房子、北白川宮妃祥子	東京特設中等教員養成所第一回卒業式	
34	昭和17年7月	賀陽宮恒憲王	御視察（本校・附属校園）	

35	昭和 22 年秋	皇后、孝宮和子内親王、 順宮厚子内親王、 清宮貴子内親王	附属高等女学校 バレーボール御観戦
36	昭和 24 年 11 月 5 日	皇后	お茶の水女子大学開学なら びに東京女子高等師範 学校七十五周年祝典

※8 記念品製作：職員・生徒・児童・幼児一同

※9 「女子学習院に行啓の際」。ただし、他資料より、日付は十二月七日であり、金円の他に御菓子を下賜されていることが判明する。

* 出典は、16～22：『六十年史』、23：『校報』95、24：『校報』135、25：『六十年史』・『校報』148・151・152・号外、26：『六十年史』・『校報』262～264、27：『校報』323、28：『校報』331・333・334、29：『校報』371、30：『校報』405・407・408、31：『校報』508、32～36：現存資料

大正期における皇族の来校者は、皇后（貞明皇后）、伏見宮博恭王妃経子、東伏見宮妃周子の3名である。ただし、博恭王妃経子の来校（16）は、令旨¹²に「皇后陛下ノ旨ヲ承ケ来リ臨ミテ」とあるように貞明皇后の代理として開校記念式に臨席したものであるため、皇后の行啓に準じるものである。東伏見宮妃周子は大日本婦人教育会総裁を務めるなど女子教育に関心が高く、また能筆として知られる人物である。皇后については第2節で、東伏見宮妃周子については第3節で扱うこととする。

昭和に入ると、23、24と宮妃や女王が複数で運動会に臨席する事例が2件見られる。明治期の4と類似するようにも思われるが、このような形の来校が継続的に実施されることはなかった。その後は、皇太后（貞明皇后）、皇后（香淳皇后）、東伏見宮妃周子、北白川宮妃祥子、北白川宮妃房子、李王妃方子女王、朝香宮鳩彦王、賀陽宮恒憲王が来校者として確認される。北白川宮妃祥子は女高師附属高等女学校の卒業生であり、本学とは特別な関係にある皇族であるため、北白川宮妃房子とともに第3節で扱うこととする。27の李王妃方子女王は、午前10時より11時35分まで「保育ノ實際ニ就キ巡覧」したとあり¹³、附属幼稚園のみを訪問したものであろうか。31の朝香宮鳩彦王は本校に併設する「東京特設中等教員養成所御視察ノ為」に来校したものである（東京特設中等教員養成所については第3章第2節で後述する）¹⁴。34の賀陽宮恒憲王の来校の様子は、『賀陽宮恒憲王殿下東京女子高等師範学校御合臨写真帖』と題するアルバムに収められている。本館前に行く馬上の姿や小学生による相撲を観覧する様子の写真などから、本校および附属校園を視察していることが判明する（写真2）¹⁵。このような本学や女子教育との関わりが薄い皇族による来校は、昭和10年前後から散見されるようになり、自ずと時局の変化を意識させられよう。

写真2 小学生の相撲を観覧する恒憲王



第2節 皇后・皇太后による行啓

貞明皇后の行啓は、皇后としての4回と皇太后としての1回で計5回にのぼる。貞明皇后の最初の行啓(17)においては、職員・生徒・児童・幼児一同に宛てて御菓子料として金一封を下賜された。行啓の後、女高師ではこの下賜金で記念品を製作し、一同に頒下するとともに皇后職にも献上した。この際の記念品と思しき「大正五年」「行啓記念」と刻印されたメダルが、大正8年の卒業生により寄贈されている(写真3)¹⁶。19は女子学習院への行啓であるが、関東大震災で被災し女子学習院の教室を間借りしていた

写真3 行啓記念メダル(大正5年10月23日)



附属高等女学校の授業も同時に巡覧された。行啓関係の日記や当日の教案、罹災状況の調査などの書類を綴った記録が現存し¹⁷、当日の様子を生徒が記した作文が『光栄』と題された作文集として残る(詳細は第3章第3節で言及する)¹⁸。また、20の行啓と関連しては、昭憲皇太后の最後の行啓(15)と同様に「行啓記念」「大正拾参拾貳七」銘の記念スタンプが製作されている(図2)¹⁹。22の行啓は開校五十年記念式

図2 行啓記念スタンプ(大正13年10月27日)



への臨席を目的とするものであり、記念式典においては令旨が下賜された。この令旨は複製印刷物が作製されている。また、当日の御菓子料で『開校五十年記念写真帖』を製作した²⁰。30は昭和期に皇太后として行啓したものである。当年11月29日には大塚の地における本校および附属校園の建物の完備および移転を祝する落成記念式が挙行されるが²¹、この行啓はそれに1ヶ月先行する形で実施された。附属小学校に現存する当行啓に関する一連の配布物や教案などを綴った記録²²には、「(七) 御下賜 1、行啓当日、皇

写真4 行啓記念の葉（昭和11年10月21日）



太后陛下ヨリ職員へ御菓子ト酒肴料ヲ、生徒・児童・幼児一同ニ御土産料ヲ下賜セラレタ旨報告アリ」とあり、前回までの行啓と同様に下賜金を賜与されていることが判明する。またこの下賜金で製作され、一同に配布された葉も残っている（写真4）²³。

22の行啓の際に賜った令旨には、「昭憲皇太后曩に開業の式に臨ませられ深く当路の計画を佳尚し女子教育を発展せしむべきことを親諭せらる」と本学の成立および女子教育発展への昭憲皇太后の関与に言及し、かつ「庶幾は遺範に副ふことあらむ」と今後も昭憲皇太后の示した軌範に従うよう諭す文言で結ばれている。この文面からは、貞明皇后の行啓自体が昭憲皇太后の遺例を継承したものと捉えることができよう。また、皇后は幼少時に附属幼稚園に通園しており²⁴、別の側面から女高師と関係があったとも言える。

香淳皇后の行啓は25、28、32、35、36の計5回にのぼる。最初の行啓である25においては、講堂演習、附属幼稚園・実験・体操などを巡覧した。前例に従い校長は令旨を賜ったが、文面に「此校ハ創設以来既ニ五十余年ヲ経成績愈々揚カリ国家社会ニ貢献セシ所洵ニ多シ此レ実ニ昭憲皇太后並皇太后陛下ノ御懿旨ニ副フ所以タルヲ信ス」とある点からは、昭憲皇太后および皇太后（貞明皇后）による本学の振興を認め、またそれを継承しようとする姿勢が窺える。このような姿勢は28の行啓時の令旨にも認められ、「昭憲皇太后曩に開業の式に臨ませられ当局の計画を佳尚せられ他日其の美果の全国に蕃結せんむことを庶幾ひ給へり今や女子教育大に興り此校の成績愈々揚れるは其の淵源する所甚た遠しと謂ふへし」と、昭憲皇太后の開校時の令旨を抜粋する形で引用し、女子教育の振興と本学の発展を昭憲皇太后の事績としている。ところが、戦後の36においては、令旨自体を「御言葉」と呼称するようになり、また戦前においては絶えず言及されていた昭憲皇太后の遺例には一切触れずに「由緒深い伝統」という語を用いるなど、時代の変移を示している²⁵。

なお、附属図書館には「良子女王筆」として「春夜宴桃李園序」と題する掛軸が保管されている。香淳皇后と女高師の皇后冊立以前からの繋がりを窺わせよう。

28・32の行啓に関しては関連資料がよく残るため、第3章で詳述することとする。

第3節 女高師と縁の深い皇族の来校

この節では、皇太后・皇后以外の皇族で、女高師と特に深い関わりを有していた東伏見宮妃周子と北白川宮妃祥子を取り上げることとする。

東伏見宮妃周子は依仁親王の妃であり、大日本婦人教育会や愛国婦人会の総裁を務めた人物である。女高師への来校は大正期に2回（18・21）、昭和期に1回（26）の計3回にのぼる。大正期の2回は、本校および附属校園の授業を巡覧しているが、18に際しては「平常の授業そのままを御覧になりたい」との意向を示すなど、女子教育に対する関心のほどを窺わせる。26の昭和7年11月29日の来校は本学開校記念式並びに附属高等女学校創立五十周年祝賀式への臨席であるが、これに先立ち周子妃からは6年4月27日に御染筆の「徽音堂」扁額（写真5）を、また7年6月13日に御染筆の色紙（写真6）²⁶を下賜されている。

写真5 「徽音堂」扁額



写真6 東伏見宮妃周子色紙



ここで、関東大震災後の新校舎への移転について簡単に触れておく。大正12年9月1日に発生した大震災によりお茶の水の旧校舎は焼失し、翌年3月20日に仮校舎が建設される。しかし、昭和3年11月26日に大塚に新校地が交付され、段階的に工事および移転が実施された。4年11月22日に寄宿舎が、6年6月に附属幼稚園が、7年8月31日に本校本館および講堂が竣成し、同年12月28日に本校および附属幼稚園が移転をする。8年12月に図書閲覧室・書庫が竣成し、附属小学校の移転は9年3月31日に、附属高等女学校の移転は10年3月31日に実施された。ついで、11年3月24日の第二寄宿舎の竣成、同年6月の正門の完成および構内道路の舗装工事完了を経て、同年11月28日に落成式を迎える。

周子妃から講堂である徽音堂のための扁額、および図書閲覧室に掲揚するための色紙が寄せられたのはその最中のことであり、また26の記念式も「徽音堂」扁額の掲げられた新造の徽音堂で挙行されている。

なお、徽音堂の正面左右には、左に明治天皇像（松岡映丘画）、右に昭憲皇太后像（矢澤弦月画）が掛けられていたことが知られる。開校六十周年記念式のアルバムで確認できることより、昭和9年には掲揚されていたことがわかる。また同時期には、同じく矢澤弦月の手になる昭憲皇太后の女高師開校式への出席の様子を描いた「女子師範学校行啓」が、桜蔭会（本学同窓会）によって聖徳記念絵画館へ寄贈されている²⁷。昭和初期の女高師において、昭憲皇太后への追慕の念が深まる様が見て取れよう。

北白川宮妃祥子は、徳川義徳の娘であり、昭和9年に附属高等女学校を卒業、昭和10年4月26日に永久王の妃となる。女高師への来校は29・33の2度である。29には「北白川宮祥子妃殿下東京女子高等師

写真7 運動会を観覧する北白川宮妃祥子



範学校御成ノ御写真」(写真7)が残されており、同日の「東京女子高等師範学校運動会ニ於ケル白衣勇士写真」より、当運動会は傷病兵の慰撫も兼ねていたことが判明する²⁸。33の来校に関しては、「北白川宮大妃殿下並妃殿下東京特設中等教員養成所御成ノ御写真」が残されており²⁹、「北白川宮大妃」こと成久王妃房子とともに本校併設の東京特設中等教員養成所を訪れたものである。なお、昭和13年1月22日付『校報』第452号には、本校・養成所・附属高等女学校生徒作製の出征将士慰問品(防寒靴下)に対する北白川宮家からの礼状が収められており、来校時以外の場でも様々な結びつきを有していた様子を窺わせる。

第3章 行啓の実像

昭和期の皇后行啓に関しては、資料が比較的良好で、かつ豊富に残されているため、その実態が判明しやすい。以下に、28と32の皇后行啓について、その実像を再現してみよう。

第1節 昭和9年10月29日の皇后行啓

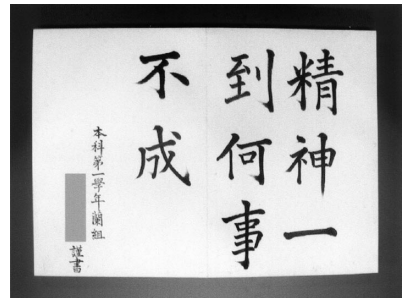
昭和9年10月29日には、開校六十年記念式が行われた。この記念式に皇后が行啓している。昭和9年10月6日付『校報』第331号によれば、「来ル十月二十九日(月)本校開校六十年記念式ヲ挙行ス此ノ記念式ニ皇后陛下行啓可被遊旨御内沙汰アリタリ」とある。ついで10月20日付『校報』第333号では、行事予定表が掲載され、10月25日午後から休業して、連日、大掃除や予行演習が行われていたことがわかる。行啓当日の次第は、11月3日付『校報』第334号に詳述されている。それによれば、「皇后陛下ニハ十月二十九日午前九時二十分本校ニ行啓アラセラレ本校開校六十年記念式ニ御臨場令旨ヲ賜フ式後陳列品ヲ台覧次イテ本校養成所及附属高等女学校生徒並ニ附属小学校児童附属幼稚園幼児ノ体操及遊戯ヲ台覧アリ午前十一時四十五分御機嫌麗シク御還啓遊ハサレタリ」とある。『開校六十年記念式次第概要』³⁰によれば、記念式は講堂において挙行され、体操及び遊戯は運動場で行われている。『校報』にあるように、令旨を賜っているが、それは現在も現物が本学に保管されている。アルバム『東京女子高等師範学校開校六十年記念式並びに附属高等女学校創立五十年祝賀式写真集』³¹には、奉送迎の様子、記念式で令旨を読み上げる皇

写真8 校内を巡覧する香淳皇后



后、構内を巡覧したり運動場を観覧する皇后の写真が掲載されており、行啓の状況が具体的に推察できる（写真8）。また当日の陳列品の写真も多数見られる（写真9）。このときに展示された作品は現在に至るまで残るものも多く、附属図書館や、附属高等学校、附属小学校に保管されている。中でも特筆すべきは、『東京女子高等師範学校附属高等女学校生徒成績品』³²である。跋文に「昭和九年十月二十九日開校六十年記念式ニ際シ皇后陛下行啓アラセラレ左記日録ノ生徒成績品ヲ献上セリ 本図録ハ其ノ際陳列室ニ於テ台覧ヲ賜ハリ尚一般来賓ノ観覧ニ供シタル生徒成績品ノ一部ヲ集メテ後日ノ参考ノ為ニ献上品トホボ同一形式（但シ装釘紙質ハ別）ニ作製シタルモノナリ 昭和十年三月」とあり、続いて「献上成績目録」が書かれる。ついで、生徒の作品の一部がまとめて綴じられ、その中には写真9に展示の様子が写る作品も含まれている（写真10）。まさに当日の展示品が、大変良好な状態で現在に至るまで保管されているのである。

写真9 行啓当日の陳列の様子 写真10 現存する生徒作品（写真9の右列二段目のもの）



このように、本学に保管されている資料から、昭和9年10月29日の皇后行啓はかなり具体的に復元できる。

第2節 昭和15年12月3日の皇后行啓

昭和14年7月、軍事保護院は文部省と協力して、戦没軍人・軍属の遺族のうち中等学校女教員を志す者のために、特設教員養成所を開設することとし、女高師に東京特設中等教員養成所が併設された。修業年限は2年である。第1回生の入学は同年9月で、第7回生が昭和22年3月に修了するまで存続した³³。生徒たちは、遺児を連れて母子寮に入居し、ともに寮生活をしながら学問に励む。昭和14年10月には、朝香宮鳩彦王が恩賜財団軍人援護会の総裁として、東京特設中等教員養成所を視察した。また昭和16年7月の養成所第1回生卒業式には、本庄繁軍事保護院総裁、橋田邦彦文相、東条英機陸相夫妻とともに、

北白川宮大妃房子、永久王妃祥子が臨席している。

そのような状況下で、昭和15年12月3日には、皇后の行啓があった。この行啓には東京特設中等教員養成所を視察する意味もあったと思われる。本学に残る関係資料としては、①「昭和十五年十二月三日 皇后陛下行啓ニ関スル記録 附属小学校」³⁴、②「昭和十五年十二月三日 皇后陛下行啓関係書類」³⁵、③『昭和十五年十二月三日 授業の概要 東京女子高等師範学校・東京特設中等教員養成所』³⁶、④『昭和十五年十二月三日 皇后陛下行啓記念写真帖』³⁷、⑤当時の新聞記事³⁸、⑥当日歌われた校歌「みかかずば」と体育科が歌った女声三部合唱「歌の殿堂」を録音したSPレコード³⁹など、いずれも貴重な資料があげられる。

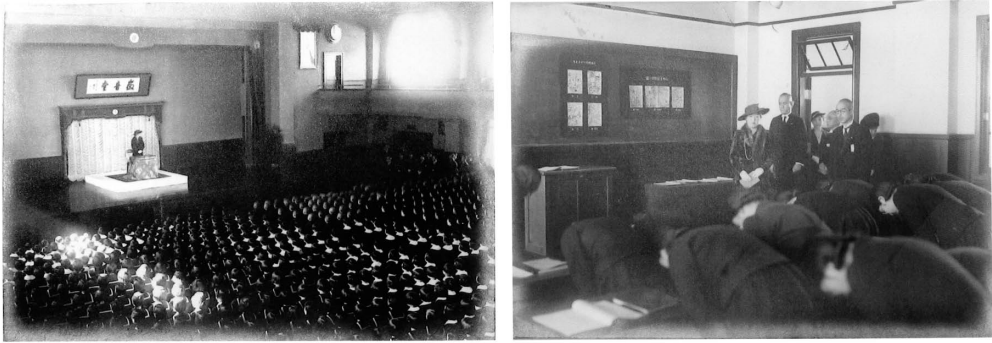
①の綴りでは、はじめに、「昭和十五年十一月二十六日行啓に関する記録」がある。それによると、当初は11月26日に行啓が実施される予定であったが、幼稚園児の中に猩紅熱に罹患した者が出たため、12月3日に延期されている。事前の書類としては、「行啓に関する事務分掌」「行啓ニ関スル行事並第二学期末行事予定」「行啓当日各係案」「皇后陛下行啓御次第ニ関スル職員生徒児童心得」「諸室配置略図」などがあげられる。その中の「清掃作業記録」には、「十一月初旬より毎日の普通掃除に、加へて廊下みがき、金物みがき等部分作業を進め、後数回入念なる清掃をなせり。御通路にあたる廊下の一部を通行止し、数日間、廊下の運動靴禁止を励行して清潔を保てり。」とあり、特に清掃に気を遣ったことが窺われる。また、①で興味深いのは、当日皇后が巡覧する附属小学校の各授業の事前の指導案が添付されていることである。「体錬科 武道 剣道・薙刀」「国民科 国語 月と雲」「理科 木ノ葉」「芸能科 工作 飛行機」「芸能科 音楽 聴音練習・俵の山」「国民科 郷土ノ観察」の6科目が行われる予定であったことがわかる。

②の綴りには、「奉送迎について」と題した、奉送迎の際の職員や来賓・生徒が並ぶ位置を示した図や、「接待係注意事項」などが見られる。「行啓ニ関スル行事予定」によれば、行啓の2週間前から、下検分に始まり、5回にわたる大掃除、草取、奉迎・講堂・体操・遊戯・奉送の予行演習、諸室の準備、最後の検閲、と行啓を迎える準備が行われていた。「諸室配置略図」からは、本館2階正面の部屋が皇后の休憩所である便殿であり、宮内官・女官室や大臣・総裁・学校長室、憲兵隊長・供奉将校・警務部長室、憲兵室、大塚警察員・大塚消防署員室、新聞記者写真班室などが、本館の周囲に設えられたことがわかる。また当日係の者が付けたと思われる、安全ピン付き紅白のリボンも数点残っている。

③は行啓当日の行事次第がすべて記載されている小冊子で、はじめに奉迎式の次第が記されている。奉迎式は講堂で行われ、国歌「君が代」奉唱、東京女子高等師範学校概況・東京特設中等教員養成所概要の言上、校歌奉唱が行われる。ついで、附属幼稚園を訪れ、自由画「慰問絵はがき」、粘土製作、誘導保育「時計店」、唱歌遊戯、砂場遊びなどを御覧になる。その内容には、時局柄、戦時色の濃いものが見受けられる。その次は附属小学校に進み、授業や陳列品の数々を御覧になる。授業は、①で触れた指導案の通りであったが、「国民科 郷土ノ観察」は実施されなかった。附属高等女学校では、陳列品として写真や郊外園の作物などが展示された。授業は、裁縫実習、教育、数学、国語（作文）、体育競技であった。本校・養成所では、地理、教育、植物実験、音楽、数学化学、国語、生物実習、衣類整理実習、割烹実習、裁縫実習が行われ、それぞれを皇后が見学されている。最後に、運動場で体操・薙刀・行進遊戯をご覧になり、奉祝国民歌「紀元二千六百年」を合唱して、行事の全てが終了する。当日の時程表より、午前10時に着御、午後3時に還御という、実に5時間にもわたる行啓であったことがわかる。還御後、職員・生徒・児童・幼児一同に御下賜のお菓子が配られ、解散となった。

④は、当日の写真を時間順に並べ、奉迎式や巡覧の状況、皇后の表情、教室の雰囲気、園児・児童・生徒の様子などがよくわかる、装丁も立派なアルバムである（写真11-1・2）。中でも特に目を引くのは、

写真 11 - 1 徽音堂における奉迎式(正面右側に昭憲皇太后像が掛かる) 写真 11 - 2 教室を巡覧する香淳皇后



着御の際の出迎えに、特設中等教員養成所の生徒のほか、生徒の子どもたち8名も代表として東京女子高等師範学校に出向いて、お迎えをしている写真である。

⑤の新聞記事は、数種類のものが資料として保管されている。写真はいずれも、特設中等教員養成所の生徒の子どもたちが、皇后を出迎えてお辞儀しているのに対し、皇后が微笑みかけているもので、記事では、「皇后陛下・東京女高師へ行啓、「教壇の未亡人」感涙、授業実習など五時間に亘り台覧」、「光栄の遺児八名、畏れし、列立奉拝を賜ふ」、「皇后陛下・女高師行啓、五時間にわたつて、授業を御巡覧、勇士未亡人光栄に感涙」、「皇后陛下女高師に行啓、学ぶ女性の栄光、再起いそしむ勇士未亡人感涙」、「畏れし・興亜の遺児に、御慈愛深き御微笑、皇后陛下女高師行啓」などの見出しが大きく掲げられ、東京特設中等教員養成所の生徒や遺児に対する皇后の目配りが強調されている⁴⁰。

⑥は、当日歌われた校歌「みがかずば」と女声三部合唱の「歌の殿堂」が録音されたものである。③によれば、「歌の殿堂」はワーグナー作曲歌劇「タンホイザー」中の合唱より、高橋信夫が作詞したもので、音楽の授業で体育科2・3・4学年が歌ったものである。『授業の概要』にはその歌詞も収められている。当時の肉声が聴かれる、貴重な録音資料である。

このように、昭和15年12月3日の皇后行啓も、学内資料や報道資料により、つぶさに再現することができる。

第3節 生徒の記録

大正12年12月7日、皇后は女子学習院に行啓した際(19)、女高師附属高等女学校の授業も巡覧した。その際の生徒の作文集が保管されている。このとき御覧になったのは、附属高等女学校の本科第5学年の家事と教育、本科第4学年の国語の3教室であった。文集は、『光栄』と表題が書かれた朝日の絵の表紙のついた本科第4学年甲組のものと、表題はないが鶴の絵の表紙がついた本科第3学年乙組のもの2冊である(写真12)。どちらの組も当日の巡覧には組み込まれておらず、奉送迎に居並びお辞儀をしたほかは、教室内でただ皇后の足音だけを緊張して聞いている。ここに、その文章をいくつか原文のまま引用してみよう。

「辱き玉歩の響が

(中略) 緊張と静寂とのみなぎつた教室には、先生の緊張した、しかし低い御声がひびいていました。けれどもそれには耳をかたむけようとも致しません。今に!今に!皇后陛下の畏れ多い玉歩のひびきが、なつかしみを帯びたその御絹ずれの音が……。 (中略)

写真 12 附属高等女学校生徒作文集



やがて又皆の立つひゞきがしてドアが開いて又しまりました。コツコツコツ……靴の音がだんだん近づいて参ります。莊嚴なしかしなつかしいその御靴音……今陛下は私共の御教室の前を御通過遊ばしました。

コツコツコツと大きい靴音の後にコトコトコトとおやさしいおしとやかな玉歩のひゞきが……、あゝ、たつたドア—重隔つた彼方を……。しかしそれは直に次の御教室に吸ひ込まれて行きました。あゝ、今の玉歩のひゞきが私共の御教室へ吸ひ込まれて下さつたなら……。(後略)』

「其の時の私達

(中略) とうとうその時が来た。戸と戸のすきから皇后さまのそれかとも思はれる影の又影が、その細い細いすきまの一点にのみ強くみつめる目にちらつと入つた。かうして次ぎの五分も過ぎた。カーテンのすきから私はあの黒いお帽子を拝すことが出来た。私達の不安な時はすべて行ってしまった。けれど乙組の皆さんは……。(後略)』

「床をみつめて

(中略) 後を見返りながら急いでいた私の足は、ふと吸ひ付けられた様に立止まつた。

此処。今しがた陛下の玉歩を運ばせ給ひし所。かすかに入り交る靴跡の、いづれは尊き御方のものでもあらうものを。

同じ場所。さうしたはかない嬉しさのみ込み上げて、緑の床、我が足下をつくづくと見入つたのであつた。

それにしてもあゝ、運つたなかりし子等は、たゞその通御の御姿を扉の此方に想ひ参らせ、玉歩の音に胸波立たすのみ。尊くも御うるはしきみすがたは、かげながらさへ拝することを許されないのである。畏き極みながら、たゞ三尺の間をさへ隔りなく、御ほゝえみをしのび参らす者ありともきくものを。かく思ふ淋しき心は今日の行啓を限りなき幸と知りつゝ、すきまもる師走の風に、いともつめたくふるふのであつた。』

以上は、いずれも『光栄』から引用したものであるが、当日の生徒の緊張、皇后への尊敬の念、廊下の足音に耳を澄ます様子、第4学年への巡覧は甲組ではなく乙組であり、それが残念であったことなどが、窺い知られる。大変興味深く、かつ貴重な資料であろう。

また、本学には高等女学校の昭和10年度から昭和27年度までの学級日誌が保管されている⁴¹。その中から、皇族の来校があった日の記録を、いくつか抜粋してみよう。

まず、昭和10年10月18日の神宮外苑における運動会に北白川宮妃祥子が来校(29)した際の記載を

あげる。「今日は北白川宮妃殿下の御台臨を仰ぎ、一同只々感激に堪へませんでした。」(本科第三学年菊組)。「この日は北白川宮妃殿下の台臨を仰ぎ、光栄に満ち満ちて一同元気に競技場一杯に活躍致しました。」(本科第四学年蘭組)。「又此度の運動会に私達が最光栄に感じました事は北白河宮妃殿下のお成りでした。より一増緊張した、誇りかな気持に満されました。」(専攻科第三学年国語)

ついで、昭和11年10月21日の皇太后の行啓(30)に関しては、各組の学級日誌から、それに先立つ10月13日より授業を休止して予行練習や掃除を行っていたことがわかる。当日の記録の例としては、「今朝は我が女子教育に深く大御心を注がせ給ふ皇太后陛下の行啓を祝ふが如く秋晴の紺碧の空は一際高く濃く澄み渡つている。(中略)私共は斯くも女子教育に御留意せらるゝ大國母陛下を頂く光栄を感涙しつゝ、謹しみて奉送申し上げます。」(本科第四学年蘭組)などが、あげられる。

昭和15年12月3日の皇后行啓(32)については、すでに第3章第2節で詳述したが、学級日誌には、次のような記載がある。「開校以来行啓を拝する事幾十度今日、又國母陛下の行啓をかたじけなく致します事もお茶の水の生徒なればこそと心から感激し幸福に思ひますと共に戦時下女子教育に深く御心をお留め下さるかたじけなさをひしひしと身に感じました。」(本科第四学年蘭組)。「此の一日は我が校の生徒として皇国の民の一人として忘れる事の出来ぬ光栄の一日でございました。」(専攻科第三学年家事)。

このように、当時の学級日誌には、大変具体的な事実の記載が見られると同時に、当日ならではの生徒の肉声が聞こえるかのようなのである。

なお、生徒の記録としての文献ではないが、「行幸啓ノ節職員学生生徒児童敬礼方法の実演写真」と書かれた封筒に入った、10数枚の写真が、当時の行啓のための準備を物語るものとして注目に値する⁴²。背景の校舎が大塚の敷地の高等女学校なので、時期は昭和11年以降の女高師時代のものと考えられる。本館に向かう中央の道の脇に、フロックコートを着た男性教官と紋付袴を着た女高師の生徒たちが、起立して整列し、あるいは敷物をしいて正座して、お辞儀や顔を貴人に向ける奉送迎の実演をしている写真である(写真13-1・2)。行啓の際の生徒たちの奉送迎の様子が具体的に窺い知られる貴重な記録である。

写真13-1・2 奉送迎の実演風景



おわりに

以上で述べてきたように、本学は開校から一貫して皇室との強い関わりを保ってきた。大学資料の悉皆調査の過程で、さまざまな皇室関連資料が見出され、それが本学の歴史の一側面を語ることとなる。『百

年史』の記載を補完する資料や、掲載されていない事実を物語る資料など、新たに多数発見されたことは、大学資料調査の大きな成果であり、悉皆調査の重要性を示すものである。そしてそれは、調査の継続に明るい展望を持たせよう。すなわち、調査を続けることによって、さらなる新出資料発見の可能性が大いに期待されるのである。

資料調査の今後の課題としては、まず、資料の保存状況の改善があげられる。現在は、各資料が大学構内に散在し、かつ非常に劣悪な環境下に置かれているものも多い。この問題を認識し、早急にしかるべき手立てを講じなければ、貴重な資料の劣化を招こう。また、大学資料には、悉皆調査の対象となっている本学所蔵資料のほかに、卒業生への聞き取り調査の結果や、卒業生やその遺族からの新たな寄贈資料も含まれる。それらの分析や、整理、調査も今後取り組むべき大きな課題である⁴³。

本稿では、大学資料調査の成果として、女高師と皇室との関連についてまとめた上、大学資料調査の意義に言及し、かつ今後の課題について問題提起をした。これにより、大学資料調査に対する一層のご理解とご協力が得られるならば、幸甚である。

【付記】

本稿で論じた女高師と皇室との関係については、平成19年3月23日～4月11日に、お茶の水女子大学歴史資料館において企画展示「女高師と皇室展」が開催された。展示では、大学および附属図書館、附属校園に存在する皇室関係資料が一堂に会し、本学と皇室との関わり之の深さとその歴史を知る好機となった。展示品は、下賜品や令旨、当時の書類、アルバム、絵画、書、写真、新聞記事、音声など、多岐にわたり、春休み期間中にもかかわらず、学内外の教職員、学生、受験生、父母、そして宮内庁書陵部や大学関係者など、来館者は約300名にのぼった。

【謝辞】

大学資料調査および展示の企画・実施にあたっては、本学大学院生で、当時アカデミック・アシスタントであった和田華子氏、本学卒業生平松左枝子氏の御協力をいただきました。ここに記して感謝する次第です。

【註】

- 1 真辺美佐「昭憲皇太后と華族女学校 ―設立及び改革に果たした皇太后の役割を中心に―」（『書陵部紀要』第58号、2007年3月）など。
- 2 お茶の水女子大学所蔵。「お茶の水女子大学百年史」刊行委員会編『お茶の水女子大学百年史』（1984年5月、以下『百年史』と略す）13頁。
- 3 お茶の水女子大学大学資料委員会所蔵。
- 4 東京女子高等師範学校編『東京女子高等師範学校六十年史』（1934年10月、以下『六十年史』と略す）による。『百年史』では「明治八年十二月二十日」とする。
- 5 お茶の水女子大学所蔵。
- 6 お茶の水女子大学大学資料委員会所蔵。
- 7 お茶の水女子大学大学資料委員会所蔵。
- 8 お茶の水女子大学所蔵。

- 9 『六十年史』129～130頁。
- 10 お茶の水女子大学所蔵。伝酒井抱一筆。新設の礼節教場落成を祝して、明治14年2月13日に下賜された。
- 11 奥田環「東京女子高等師範学校の「学校博物館」」（『全国大学博物館学講座協議会研究紀要』第7号、2002年3月）。
- 12 お茶の水女子大学大学資料委員会所蔵。
- 13 昭和9年6月23日付『校報』第323号
- 14 昭和14年10月14日付『校報』第508号。またその際の写真が「朝香宮鳩彦王殿下東京特設中等教員養成所御成ノ写真」と題し、お茶の水女子大学附属図書館に所蔵されている。
- 15 お茶の水女子大学附属図書館所蔵。
- 16 お茶の水女子大学大学資料委員会所蔵。直径1.6cm。
- 17 お茶の水女子大学附属高等学校所蔵。
- 18 お茶の水女子大学附属高等学校所蔵。
- 19 お茶の水女子大学大学資料委員会所蔵。
- 20 令旨、複製、写真帖ともに、お茶の水女子大学大学資料委員会所蔵。
- 21 記念祝賀式の模様を収めた16mmフィルムが資料調査で発見されたが、劣化により再生が困難な状態であったため、カットフィルムに修復した。お茶の水女子大学大学資料委員会所蔵。
- 22 お茶の水女子大学附属小学校所蔵。
- 23 お茶の水女子大学附属図書館所蔵。
- 24 『六十年史』139～140頁。なお、具体的な在園時期について、同179頁には「御在園当時（明治二十二三年頃）」と見える。
- 25 「御言葉」を含めた関係書類はお茶の水女子大学大学資料委員会に、『お茶の水女子大学開学記念東京女子高等師範学校創立七十五周年記念アルバム』はお茶の水女子大学附属図書館に保管されている。
- 26 昭和7年6月18日付『校報』第248号、「去ル六月十三日東伏見宮大妃殿下ヨリ追テ新築セラルヘキ図書閲覧室ニ奉掲ノ料トシテ左ノ御歌（御色紙ニ御染筆アリタルモノ）ヲ本校ニ御下賜アラセラレタリ」。
- 27 『百年史』13頁。
- 28 お茶の水女子大学附属図書館所蔵。
- 29 お茶の水女子大学附属図書館所蔵。
- 30 お茶の水女子大学大学資料委員会所蔵。
- 31 お茶の水女子大学附属図書館所蔵。
- 32 お茶の水女子大学附属高等学校所蔵。
- 33 奥田環「東京特設中等教員養成所と貞秀寮 一戦時下の母子支援一」（お茶の水女子大学『人文科学研究』第3巻、2007年3月）。
- 34 お茶の水女子大学附属小学校所蔵。
- 35 お茶の水女子大学附属高等学校所蔵。
- 36 お茶の水女子大学附属図書館所蔵。
- 37 お茶の水女子大学附属図書館所蔵。
- 38 お茶の水女子大学大学資料委員会所蔵。

39 お茶の水女子大学附属図書館所蔵。

40 『都新聞』昭和15年12月4日朝刊、『東京日日新聞』昭和15年12月4日夕刊、『讀賣新聞』昭和15年12月4日夕刊、『國民新聞』昭和15年12月4日朝刊。

41 お茶の水女子大学附属図書館所蔵。なお昭和22年度からは、新制の附属中学校が設置され、女学校本科第3学年次までは学級日誌も中学校のものとなっている。

42 お茶の水女子大学大学資料委員会所蔵。

43 『お茶の水史学』第51号（2008年3月）では、女高師生徒への聞き取り調査の成果をまとめたオーラルヒストリー特集が組まれている。